

俳書標題の意匠について―『草』型標題を中心に―

安保 博史

《一》

『竹馬狂吟集』十巻は、「言ひ捨て」となっていた俳諧連歌を初めて収録した現存最古の俳諧撰集であり、巻一〜四は発句、巻五〜十は付合に分け、発句四季計二十句、付句四季・恋・雑計二百十七組を収めている。編者は未詳であるが、以下の通り明応八年（一四九九）の序文を備え、当時の俳諧観を窺い知ることができる。

つくばの山のこの餅かの餅、食はぬ人も侍らぬ折なれば、神もかぶり、仏も捨てたまはぬとやらん。此中にして、難波津のあしこしも立たぬほどに衰へ、和歌の浦波立ち居にはあしへの音高きのみなれども、もろこしにはよこしまなからんばかりといひ、日本には心の種とやらんかけるなれば、清狂伴狂のたぐひとして、詩狂酒狂のおもむきを題とし、竹馬狂吟集と名づけ侍り。凡、東八にたづぬるたよりもなく、ひろく西九にもとむるにもあらず、人の語れる口を移し、己が聞耳に入るがばかり也。ことさら井の底の蛙の入道、住みぬる水の浅々と、林の下の梅法師句ひなく、瘦々としたるばかりのみならん。しかはあれども、梨をもとめ栗をひろふ人を道引かむをしらず、心をとる、心をなくさむたよりばかりぞかし。これもまた里犬の音こゑさながらみな得解脱の便、山田の鹿の鹿火は実相のたぐひ、

尊く思ふころばかり也。もし用ふる人あらば、上戸の着とやなり侍らん。
ときに明応の八とせ二月の十日あまり
しるすことしかなり。

右の序文は、全文俗語・縁語・掛詞・もじりを多用した「俳諧的な戯文」で記されており、「俳諧連歌」の滑稽味が横溢しているが、特に注目すべきは、『竹馬狂吟集』の命名の由来を述べた「清狂伴狂のたぐひとして、詩狂酒狂のおもむきを題とし、竹馬狂吟集と名づけ侍り」の部分である。

木村三四吾氏・井上壽氏校注・新潮日本古典集成『竹馬狂吟集 新撰犬筑波集』（昭和六十三年 新潮社刊）によれば、「清狂伴狂のたぐひ」は、「いわゆる風狂者」を指すが、ここでは「連歌にして連歌ではない俳諧連歌を作る一人」の意であるという。「詩狂酒狂のおもむき」とは、その「清狂伴狂のたぐひ」が作る俳諧連歌の卑俗で猥雑な作品世界を指す文言であるが、「詩狂酒狂」とは、古典の正統である『詩経』『書経』をもじることで、俳諧連歌が純正連歌の雅趣と似て非なることを強調し、謙退の意を言い込めようとしたものか。

連歌にして連歌ではない「俳諧連歌」を集め、「俳諧と連歌との峻別」^(注二)をもたらしした撰集は『竹馬狂吟集』と名付けられた。この標題名の「竹馬」は、木村三四吾氏の指摘の通り、「菟玖波」^(注三)（筑波）のもじりであり、「狂

吟」は清狂の者が吟じた連歌、すなわち「俳諧」を指しているのである。このように俳諧連歌集の第一の標題が、「筑波（の道）」（連歌）から一段品下ることを象徴して「竹馬」ともじるとともに、謙退の極みとも言うべき「狂」の一字を付している点は、近世期初頭の「パロディの世紀」に「雅」をもどいて卑俗化し、もって笑いを誘う様式（「なをし」）が盛行し、標題においても、古典の諸作に倣いもじって命名するブームと照応するものがあり、注目しなければならない。

俳諧連歌集の第二は、山崎宗鑑編とされる『新撰犬筑波集』である。標題は古写本系では「俳諧連歌」または「俳諧連歌抄」、刊行本系（古活字本・整版本）では『新撰犬筑波集』とある。

「俳諧連歌」・「俳諧連歌抄」という名は、井口壽氏によれば、^{（注五）}「固有名詞というよりも宗鑑の覚書きの標題」であり、『新撰犬筑波集』という名は、宗鑑没後の慶長〜寛永頃（一五九六〜一六四四）、某かによって『新撰犬筑波集』と名付けられたという。『新撰犬筑波集』は、勿論、二条良基編『菟玖波集』につぐ第二の准勅撰連歌集である宗祇編『新撰菟玖波集』を意識して命名されたのであろうが、この場合も「犬」という謙退の一字が付されている点は見落とせない。

（二）

『新撰犬筑波集』以来、三浦為春著『犬俤』（慶長末）・重頼編『犬子集』（寛永十年刊）・西武編『鷹筑波集』（寛永十九年刊）・貞徳著『新增犬筑波集』（寛永二十年刊）・季吟編『新撰犬筑波集』（万治三年刊）・銀竹軒光方編『雀子集』（寛文二年刊）・蘭秀編『後撰犬筑波集』（延宝二年

刊）・蛇鱗編『俳諧犬の尾』（天和二年刊）・鬼貫著『犬居士』（元禄三年刊）・越人編『猫の耳』（享保十四年刊）・*光編『ひなつくば』（享保二十年刊）・梅員編『猫筑波集』（宝永三年刊）・波子編『犬鼓』（正徳頃刊？）・三世湖十編『犬新山家』（享保十八年奥）・嵐山編『猿利口』（安永四年跋）・林泰道編『安永犬筑波』（安永四年刊）・虎杖編『いぬ榎集』（文化四年序）・太*編『犬古今』（文化五年刊）等と、「犬桜、犬蓼と云がごと」（『新增犬筑波集』序）く連歌・和歌等に対する謙退やもじりの意、先行書にあやかり古人に学ぶ意等を込めて、「犬」「鷹」「雀子」「猫」「雛」「猿」の字を付した標題が見られる事実は類型的意匠として注目できる。^{（注六）}

また、胤及編『鉋屑集』（万治二年刊）・梅盛編『捨子集』（万治二年序）一雪編『歌林鋸屑集』（万治三年刊）・『鄙諺集』（寛文二年刊）・良保編『破枕集』（寛文三年刊）・常矩編『俳諧捨舟』（寛文十三年刊）・重安編『糸屑』（延宝三年刊）・轍士編『糸屑』（元禄六年序）・大鶴庵塊翁編『ことばくづ』（文化十三年刊）等と、自らの撰集書を「鉋屑」「捨子」「鋸屑」「鄙諺」「捨船」「糸屑」「くづ」同然の拙き詠草を集めたもののごとく謙遜・韜晦した標題も類型的意匠として認められよう。特に、編者が未熟であるため、この書は「あしく練なしたる糸屑」（序）となったと命名の由来を掲げる重安編『糸屑』、「（命名の）由来此書は口もなし、おくもなし、たゞ結び合たる糸屑なる」（序）と記す轍士編『糸屑』の両書は、同名だけに、標題を命名する各々の発想方法が知られて興味深い。

右の中には、標題の動物名に謙退・もじり・韜晦以外の寓意を成した標題もある。例えば、尾張蕉門の越人編により春夏秋冬雑の発句集の後に歌仙五巻を収めた発句連句集の、『猫の耳』（享保十四年刊）なる標題である。本書は、罔両子序に「集を猫耳といふ事は清女が筆によるならし」と見え、

影木下機石跋に「列居椿の言の葉しげく、霸王樹のむつかしき編集の姿なればと、此老の謙題ならんかし。如何、清女がいへる猫耳を一刀に截断して俳諧の南泉と悟入しさらば、蕉風の清雅喝雷の吟をきく天然を得むことむつかしからぬ、かれが耳ならずや」と記されているところから、「むつかしげなるもの。(中略)猫の耳の中」(『枕草子』)によって謙退の意を示しながらも、禅の公案「南泉斬猫」に寓して、支考に対する敵愾心を示していることが判明する。^(まひ)この事例などは、序跋等の読みによって、標題の動物名に謙退以上の寓意が明らかとなる好例と言える。

ところで、「犬」が付された俳諧撰集の中でも、重頼編『犬子集』(寛永十年刊)は新旧世代による命名意識の齟齬が知られ、興味深い。『犬子集』という標題は、その序文に、「しかるを、『犬子集』といふ事、『犬筑波』をしたひて書たる故也」とあるところから、『新撰犬筑波集』に因んで付けられたことは明白であるが、『犬子集』という標題を掲げて上梓されるまでに様々な経緯があったことは、貞室編『玉海集追加』(寛文七年刊)跋文がつぶさに証言してくれる。

我師松永貞徳先生、あやしうみちに堪たりしかば、ながれをむすぶものおほく侍し中に、親重・重頼といふ者わきて此門にあそび、天文年中より以来の発句・付句を拾ひて一集となし給へと、師に訟へしかども、集と名づけむことをはゞかりて、しばしうけひき給はざりしを、二子頻りに懇望せしかば、黙止がたうや思はれけむ、犬築波の子かたになぞらへて犬子草といふ題号をもとめ、二弟にあたへ給ふ。よて重頼筆をとり、親重心をひとつにして、勢州山田の句帳をはじめ、都鄙の句を集るに至りて、二子が中そぼそばしう成行、剩へ師門にも疎かりし。されど彼草案は重頼が所持せしかば、頼止らずして一千五百の句を集め、草を集と題して板行せしに、

先輩たる親重が句を七十五句、をのがれ作を百五十余句書入ぬ。親重これを憤りけん、四季に四巻の句帳を作り、犬子集の千五百句をもくはへ、彼是式千六百余の句続き、犬子には前後混乱あれど、親が句はもとのまゝ百五十余書つけ、重が句は倍して三百句しるし頭し、一村といふものに清書させて開板す。しかありしより二子道をいどみて、重ははなひ草を作り、頼は毛吹草を撰み、おなじく追加を編り。

右の『玉海集追加』跋文は、親重(立圃)と重頼の「二子」が文壇名士たる貞徳に「天文年中より以来の発句・付句を拾ひて一集となし給へ」と発企し幾度も懇望したところ、貞徳はやむを得ず「犬築波(犬筑波)の子かた」に擬して『犬子草』といふ標題を与えたことを伝える。「犬子草」(「えのころ草」とも)は卑近な雑草の名である。^(まひ)俳諧風情の拙き詠草などには、これで十分なのである。そんな名を『犬筑波集』に因むからといって「二子」に与えたのである。しかも、歌壇への憚りもあって、和歌集・連歌集同等に末尾に「集と名づけむこと」は考えもしなかったのである。貞徳は、『新增犬筑波集』(寛永二十年刊)の序文の中で、「されば俳諧を犬連歌といふ心に宗鑑が題するか」と記す通り、俳諧そのものを「犬連歌」扱いして等閑に付していたわけだから、俳諧撰集の企画に食指が動くはずもなかったのである。^(まひ)しかし、重頼は、『犬子草』をもって新俳諧撰集の標題とする貞徳の態度に不満を持ち、親重(立圃)と決裂後、題の「草」の一字を捨て、和歌集並に『犬子集』と改めて刊行した。そうした重頼の行動は、加藤定彦氏の説かれる通り、「新興の庶民文芸である俳諧に対する愛着と自恃の心」の成せるところであつたらう。

このように、重頼にとって、『犬子集』という名は、俳諧を「晴」の文事に押し上げようとする明確な意志表示であつたのである。事実、「名は体を

表す」、重頼は堂々たる大本五冊の第二冊末に句引を加えて作者名を列記するとともに、第五冊に貴顕・名家の作品を掲げて、俳諧の伝統と權威を演出したのである。特に名もなき庶民の「言ひ捨て」が作者名を付して記録され、句引に名前まで発表されるという事実は当時としては画期的な出来事であった。

一方、『犬子集』が刊行された同じ年、親重（立圃）は、重頼と衝突の末、急遽『犬子集』草稿に自身の句や親重（立圃）周辺の俳諧好士の句を増補した撰集を編み（寛永十年十一月奥）、『俳諧発句帳』という標題を付した。連教師の発句を集成した『大発句帳』（『発句帳』とも）に做つたものと思われる『俳諧発句帳』という標題には、俳諧を連歌並に扱う点で、『犬子集』と同じく、俳諧を独立した文芸ジャンルに引き上げようとする意欲が窺知されよう。

寛永十年、『犬子集』や『俳諧発句帳』を披見した人々は誰しも、両撰集の標題自体に事改まった新鮮感を抱き、その和歌・連歌集同等の標題の意匠に俳諧の新時代を実感したに相違ない。事実、貞徳も俳諧興隆の新潮流のもと、京都の貞徳一門は重頼や立圃等と対抗して撰集合戦を繰り広げ、グループの名誉と權威にかけて、矢継ぎ早により多くより大規模な「集」を編纂していくのである。結果、『犬子集』以後の俳諧撰集の標題には、良徳編『崑山集』（慶安四年刊）・令徳編『崑山土塵集』（明暦二年刊）・貞室編『玉海集』（明暦二年刊）・梅盛編『鸚鵡集』（明暦四年刊）・元知編『俳諧拾玉集』（万治元年刊）・胤及編『匏屑集』（万治二年刊）・季吟編『新統犬筑波集』（万治三年刊）・一雪編『歌林鋸屑集』（万治三年刊）・良保編『弁説集』（寛文元年刊）・如之編『伊勢正直集』（寛文二年刊）・『鄙諺集』（寛文二年刊）・銀竹軒光方編『雀子集』（寛文二年刊）・良保

編『破枕集』（寛文三年刊）・梅盛編『木玉集』（寛文三年刊）・梅盛編『早梅集』（寛文三年刊）・友次編『阿波手集』（寛文四年刊）・重頼編『佐夜中山集』（寛文四年刊）・梅盛編『落穂集』（寛文四年刊）等、門流の別なく、いかに謙遜・韜晦の意が滲もうとも、末尾には麗々しく「集」が付されていくのである。

《三》

さて、重頼が『犬子草』なる標題を捨て敢えて『犬子集』と名付け、親重（立圃）が連歌同等に『俳諧発句帳』と命名して俳諧撰集を上梓した事実には、特別の歴史的意義があることは諸家の指摘するところであるが、以後の俳諧撰集の標題を辿ると、なおも末尾を「草」で結ぶ標題は途絶えていないことに気付くのである（《六》『草』型標題俳書一覽参照）。しかも、同じ「草」型標題でも、俳諧を「一宵のあだ言」（宗因著『蚊柱百句』自序）、「草庵独座のなぐさみ草」（同・自跋）のように捉えて、刊行書を「拙き詠草を集めたもの」として謙退・韜晦する旧来型以外にも、様々な意匠があり、その意味するところも異なるようなのである。

もともと、「草」を伴う熟語には「手向草」や「形見草」、「手引草」や「草結び」（「道しるべ」「手引き」の意）等があるが、これらをそのまま標題の末尾に付す型は最も編集意図が顕著であり、見付けやすい。例えば、下郷伝芳編『手向草』（寛政三年成）や一瓢子編『三千風形見草』（享保十一年刊）等は文字通り遺稿集や追善集の性格を表しているし、嘯山編『発句手引草』（寛政四年序）・滄波居社友編『発句手引草』（寛政十二年序）

等は、俳諧作法書としての編集意図を「手引草」の語に明示している。その他、雀歩編『発句手引草』（文化四年刊）・同『付合手引草』（文化四年刊）等は、明らかに俳諧撰集であるにも拘らず、発句・付合の手法の便を備えた点を強調して「手引草」を名乗っているのである。また、頭成編の俳諧撰集『境海草』（万治三年刊）は、自序に、

爰に、那賀氏盛之といひしは、名におふ和泉のきぶきすきものにて、和歌の道筋、其堺に居て、ことにされ句を好み翫ぶあまりに、南北の人の句のよしあしをすぐりて、垣壁にも是をかきつけ、津守の浦のつもりなば、湊の塩のしほからき事なれど、一卷の書ともなし、こなたかなたのもてあつかひぐさにもと、内々其名を境海草といはゞやおもへる……

と記す通り、編集意図は「こなたかなたのもてあつかひぐさ」（何やかやと詠吟の参考としても取り扱える書）たらんとすることにあり、本書のよりに、「手引草」と名乗らなくとも「手引草」の意味を言い込めて『草』型標題を採用する例も見落としてはなるまい。

「草結び」を標題とした例としては、信安門の隆志が宗匠立机を記念して編んだ俳諧撰集『誹諧草むすび』（享保十四年自序）がある。本書は自序に、

やつがれ年月書集め机上に秘め置たる破壁のつたなき詠草あり。或日書肆何某来り一覽して是を桜木に鏤ん事を求む。茗荷のわすれ安きを厭ひ姜の手を述たる編巻、誰か是を執るに足らんとふかく辞し侍れども、きくらげの耳に留す、遠つ国のたづきにもなしてんと一向乞て終に懐にす。いなみがたく、却て此題号を誹諧草結と名を呼んで達人の笑ひを待つ而已。

と記す通り、本書が「草を結んで初学の道しるべとなさん」とする編者の願いにより、標題として「草結」なる語を掲げたことが知られるのである。

この手の事例は雑俳にもあり、例えば、『口合秘事手引草』（安永二年刊）の版を「再利用した改版本らしい」、梅亭撰・遊楽庵花蝶編の雑俳地口集は、『口合草結』（安永十年序）という標題をもって刊行されている事実も掲げておきたい。

ところで、立圃は、『誹諧発句帳』（寛永十年十一月一日奥）の刊行前後に、標題の末尾に「草」の一字を付した俳諧作法書『はなひ草』（寛永十三年二月二十三日奥）を公刊し、『犬子集』の編者重頼は、思いかげないことに、自ら編んだ俳諧作法書（撰集書を兼ねる）に、「毛を吹て疵を求む」の諺を用いた上二字に「草」を付した『毛吹草』（正保二年刊）という標題を与えて上梓し、また、これら「先行の類書である『はなひ草』『毛吹草』等にならった」ものか、立圃門の皆虚は明暦二年に『せわ焼草』なる標題を掲げた俳諧作法書を刊行しているが、この事実はどのように解したらよいか。

実のところ、『はなひ草』・『毛吹草』の両書の場合は序跋に徴しても『草』型標題の由来が判然としない。しかし、『せわ焼草』の場合は自跋に「彼蝸牛之角の諍を扱はんと思ふは、よきせわやき種也」の辞があるところから、標題の「草」には、単なる謙退の意ではなく、「俳諧愛好者の世話（を）焼（く）良き手引草（ハンドブック）」たらんとする意が利いていることが察知し得るのである。本書は、自序には「世話尽序」と題され、目録題・内題・尾題ともに「世話尽」とあり、自跋末尾にも「世話尽一部五巻」云々と記されているので、正式な標題が『世話尽』でないのかとの疑問は残るが、米谷巖氏のご調査によれば、綿屋文庫蔵の板本は、「せわ焼草一」「せわ焼草二」「せわ焼草三」（巻四・欠本）「せわ焼草五」という原題簽をとどめ、再版である京大蔵本も「せわ焼草一」〜「せわ焼草五」という題

箴を有するとともに、近世前期の各書籍目録にも「世話焼草」「世話焼」とあるといい、当時は『世話焼草』が正式の標題として盛んに通行していたことが分かるのである。とすると、「先行の類書」の『はなひ草』や『毛吹草』の両書の「草」にも、『せわ焼草』と同じく「手引草」の意が込められていると考えるのが自然であると思えてくる。果たして、田中善信氏も、『鷹筑波』の成立をめぐる『初期俳諧の研究』の中で、

『毛吹草』は作法書と撰集とを兼ね備えた体裁をとっているが、作法書の方により大きく比重がかけられていることは、その書名に明らかである。

つまり、『犬子集』の出版に際しては貞徳の与えた犬子草の題号を捨てて、敢えて「犬子集」と名付けた重頼が、彼自ら編集した書に「毛を吹て疵を求む」の俚諺によって『毛吹草』の題号を与えたのは、これが俳諧作法書であったに他ならず、『毛吹草』出版の、少なくとも当初の意図は俳諧作法の手引きを世に示すことであつたといつてよい。

と主張し、『毛吹草』の題号が「俳諧作法書であつた」故と推測されているが、この『毛吹草』のみならず、『はなひ草』の場合も、俳諧作法書なるが故に「手引草」的な意も込めて「草」の字が付された、と理解するのが妥当であると言えよう。

《四》

一方、『…草』型標題の由来がより明瞭に分かる事例がある。それは、『徒然草』を意識して標題に「草」を付したり、『徒然草』の書名そのものをもじったりする場合である。

夙に中村幸彦氏は、「古典と近世文学」（『中村幸彦著述集第三巻』）第三節「方丈記、徒然草の近世的享受」の中で、

随想集、または抒情あり告白あり、記事あり叙景ありの随筆を、『徒然草』の形に模して書くことは、近世を通じて断えなかつた。まずおよそ「一草」と名づける書はことごとく然りである。仮名草子の代表、井上小左衛門の『悔草』（正保四年）、俳文の中に加えてもよい太田友悦の『それぞれ草』（延宝九年）、蕉門俳人乙州の同名の書（正徳元年）、儒者雨森芳州の『たはれ草』（寛政元年）など、枚挙に暇がない。

と指摘され、同四節「徒然草受容史」の中でも、

自己の所懐を、文章として世に示し、後に残そうとする時、人々は『徒然草』の様式と文章を模倣した。仮名草子の中に分類される、やや文学的な教訓的随想集は、悉くこの種類である。『目覚草』（寛永二年跋慶安二年刊、伝烏丸光弘）、『ひそめ草』（寛永二十一年成、正保二年刊）、『悔草』（正保四年、井上小左衛門）、『にぎはひ草』（灰屋紹益）、『それぞれ草』（正徳元年、乙州）の如き手本にならつて皆「草」の文字を持つ。『新註』の作者清水春流の『睡余操筆』（寛文十一年）は『続つれづれ草』と別称され、『つれづれ草拾遺』（寛保四年、『三十幅』所収）と題するものさえある。茲来、書名を「一草」と称するものは、悉くといつてよく、『徒然草』の様式であり、芭蕉の偽書『俳諧つれづれ草』（文久元年）に至るまでおびただしく「一草」と題せずして、『徒然草』風の随筆を加えれば、様式の面で最も大きい影響を近世の書物にとどめたのは『徒然草』であつた。

と説かれるが、確かに『徒然草』の形に模して自己の所懐を著したり、『…草』型標題を名づけたりする例は枚挙に暇がなく、連俳書においても様式

・意匠面で『徒然草』を利用した事例が散見されるのである。

例えば、友悦編『それぞれ草』（延宝八年跋）は『徒然草』を模した戯文を掲出、その文章に関連する鳥・楽器・酒等に因む諸家の句を収録し、丈草著『寝ころび草』（元禄七年成）・乙州編『それぞれ草』（正徳五年刊）、黙池・菊雄編『俳諧つれづれ草』等の俳諧随筆集は『徒然草』を模倣した随想を綴り、也有著の俳論書『くだ見草』（宝暦七年跋）は標題として『徒然草』を意識した自説の謙称^{（注三十二）}を掲げ、梅間編『楽しみ草』（文政十二年刊）は『徒然草』に倣い、「にぎはしき」題から「さしもなき」題にいたる随想を「楽しむるに任せて」記している。特に、『楽しみ草』は、標題の字面のみからは『徒然草』との関わりは読み取り得ないが、其洞序に

名を聞より頓て面影はおしはからるれ、昔物語を聞て其頃の人の家のさま今によそえらる。誰もかくや我斗かと、双が岡の法師（兼好）はやされける。実さる事にて向ふ所ものなけれど、深山幽谷流水波濤をはじめ花鳥雪月想ふ処目にうかぶ。この頃名家達の句をおもひ出て向へば、賑はしく淋しく花やかなる華美其品々心意に感動するに至る。感動する所ひとつふたつもののはしに記に、折よく茂堂鶴巢のふたりまいり合せて之は興ある事になん、捨んもいかにやといふに、さらばと答えらるるは梅間先生の心なり。されば是に名のなからんを、己にかうむらせよと我らいかにやなす策は知らねど、只先生の楽しむるに任せてたのしみ草と名づけて其よしを筆にまかせにかきしるす事にこそ

とある本書成立の経緯に徴することで、『楽しみ草』が『徒然草』の形に模した編著である事実が明らかになるのだが、今後、この事例のように、『草』型標題俳書の序跋や内容を精査することで、『徒然草』型の標題例をより多く見出だせよう。

《五》

以上、『竹馬狂吟集』以来の俳書の標題における様々な意匠について基礎的考察を試み、特に『草』型標題俳書が、様々な意匠や経緯から命名されており、同じ「草」でも、謙称としての「草」、手向草・形見草の意としての「草」、手引書の意としての「草」、『徒然草』の形に模した「草」等色々あることが確認し得た。このことは、ささやかな成果ではあるが、標題文芸の基礎的研究の己なりの端緒が

開かれたようで喜ばしく思える。しかし、一方で、われわれは今まで貞室編『玉海集追加』の跋文に見える「草を集と題して板行せし」「犬子集」の輝かしい俳諧史的意義を評価するあまり、『犬子集』以後の俳諧好士達が、わざわざ『草』と題して「板行」した俳書のことなど些事に過ぎないと等閑視してきた嫌いがありはしなかったか、と反省の念も頻りなのである。

一つモデルケースを示そう。梅盛編『口真似草』（明暦二年刊）・休安編『ゆめみ草』（明暦二年奥）・蝶々子編『物忘草』（明暦三年刊）・頭成編『境海草』（万治三年刊）・蝶々子編『思出草』（寛文元年刊）・成安編『埋草』（寛文三年刊）・良保編『たはぶれ草』（寛文七年成）・未琢編『ひとつもと草』（寛文九年序）・頭成編『続境海草』（寛文十年奥）・宜久・如貞編『難波草』（寛文十一年奥）・ト琴編『玉江草』（延宝五年刊）・梅盛編『道づれ草』（延宝六年刊か）・友琴編『白根草』（延宝八年刊）等は、堂々たる俳諧撰集でありながら、それらの標題に「草」が付されている事実は、

単に自らの編著に関する謙遜・韜晦であるとして十把一絡げに片付けられない面があるのではないか。こんな疑問が従来の標題理解への省察とともに湧いてくるのである。

例えば、右の『…草』型標題俳書の中で、俳壇・師承系列の特性、俳諧圈等の点からとりわけ注目してみたいのは、大坂・堺俳壇初期の俳諧撰集群である。すなわち、大坂天満の人休安が、大坂・堺・摂津・天満住の俳人群を中心とした五百十名を糾合し、貞門の京都俳壇を圧倒した『ゆめみ草』、堺の人頭成が地元俳壇の組織化を推し進め、堺中心の入集者群を誇示した『境海草』・続編『続境海草』、堺の商人成安が編み、俳諧史上「堺俳壇の京都俳壇に対する独立意識を示している」と評される堺俳壇第二番目の俳諧撰集たる『埋草』、大坂住の宜久・如貞により季吟系の大坂俳人を中心として編まれた『難波草』等である。京都の貞門俳壇に対抗意識を示しつつ組織化されていった大坂・堺俳壇の初期の俳諧撰集の標題が、なぜかくも悉く末尾に「集」ならず「草」の字を付しているのか。

私は、この「草」に、『守武千句』・『犬筑波集』的無心所着体の笑いを捨て「晴」の文芸となった貞門俳諧の本拠地たる京都俳壇で、麗々しく「集」を付した俳諧撰集が次々と刊行されることに對するアンチテーゼを看取するのだが、いかがであろうか。この一見些細な現象の裏にあるものを総合的に検証することによって、無心所着体を復権させた宗因流俳諧（談林俳諧）が大坂を中心に全国都市俳壇を席卷していく淵源をより闡明化できはしないか、そんな期待さえ膨らんでくるのである。このことについては他日を期したい。

「名は体を表わす」。今後、右の事例のような和漢古典籍の「標題」に関する基礎的アプローチを各分野で数多く積み重ね、相互に興味深い事象

を提示しあうことで、より多くの思わぬ新知見も得られそうである。

《六》資料：「…草」型標題俳書一覽

[1] 立圃編『はなひ草』（寛永一三年（一六三六）奥）俳諧作法書。

[2] 重頼編『毛吹草』（正保二年（一六四五）刊）俳諧作法書・俳諧撰集。

[3] 重頼編『毛吹草追加』（正保四年（一六四七）刊）俳諧作法書。『毛吹草』の続編。

[4] 皆虚編『せわ焼草』（明暦二年（一六五六）刊）俳諧作法書。目録題・内題・尾題ともに「世話尽」。

[5] 梅盛編『口真似草』（明暦二年（一六五六）刊）俳諧撰集。書名の由来は「時に或人いふ、俳諧の撰集家々口まねのごとくにしてめづらしげなし。予聞てこれも又よしといひて、やがて其人を名付親にとりぬ」（序）による。

[6] 休安編『ゆめみ草』（明暦二年（一六五六）奥）俳諧撰集。

[7] 蝶々子編『物忘草』（明暦三年（一六五七）刊）俳諧撰集。

[8] 顕成編『境海草』（万治三年（一六六〇）刊）俳諧撰集。

[9] 蝶々子編『思出草』（寛文元年（一六六一）刊）俳諧撰集。

[10] 成安編『埋草』（寛文三年（一六六三）刊）俳諧撰集。

[11] **編『はなひ草大全』（寛文四年（一六六四）奥）俳諧作法書。

『はなひ草』を増補。

〔12〕由健編『都草』（寛文五年〔一六六五〕刊）俳諧撰集・俳諧作法書。

〔13〕良保編『たはぶれ草』（寛文七年〔一六六七〕成）俳諧撰集。

〔14〕未琢編『ひともと草』（寛文九年〔一六六九〕序）俳諧撰集。内題「ひともと草」。

「ひともと草」。

〔15〕頭成編『統境海草』（寛文一〇年〔一六七〇〕奥）俳諧撰集。

〔16〕宜久・如貞編『難波草』（寛文一一年〔一六七一〕奥）俳諧撰集。

〔17〕卜琴編『玉江草』（延宝五年〔一六七七〕刊）俳諧撰集。

〔18〕梅盛編『道づれ草』（延宝六年〔一六七八〕刊か）俳諧撰集。

〔19〕友琴編『白根草』（延宝八年〔一六八〇〕刊）俳諧撰集。

〔20〕幽閑（友悦）編『それぞれ草』（延宝八年〔一六八〇〕跋）俳諧撰集。『徒然草』を模した戯文を掲出。

〔21〕卜琴編『越路草』（刊年書肆名等不明・延宝年間？）俳諧撰集。

〔22〕団水編『くやみ草』（元禄五年〔一六九二〕成？）俳諧撰集。角書「俳／諧」。

「俳／諧」。

〔23〕丈草著『寝ころび草』（元禄七年〔一六九四〕成）俳諧隨筆。書名・内容ともに『徒然草』を模す。

〔24〕里圃編『誹諧翁草』（元禄八年〔一六九五〕序）俳諧追善集。

〔25〕季楽庵幾世風著『俳諧和歌草』（元禄一五年〔一七〇二〕序）俳諧作法書。

〔26〕亀助編『俳諧三年草』（元禄一七年〔一七〇四〕年刊）俳諧撰集。

〔27〕潮白編『たみの草』（宝永元年〔一七〇四〕序）俳諧撰集。

〔28〕蘭風編『萱野草』（宝永五年〔一七〇八〕序）俳諧撰集。書名は出身地の摂津国萱野村からとる。

〔29〕草土編『ねなしぐさ』（宝永六年〔一七〇九〕序）俳諧撰集。内題

「無根誹諧集」。

〔30〕光栄編『福寿草』（正徳三年〔一七一三〕序）絵俳書。角書「草華／絵本」。『宮城野』（釣竿子編・延宝三年刊）を一部改刻、改題した

もの。

もの。

〔31〕胡水編『前句附譏草』（正徳四年〔一七一四〕刊）雑俳前句付冠付集。

〔32〕乙州著『それぞれ草』（正徳五年〔一七一五〕刊）俳諧隨筆集。『徒然草』を模した処世訓的随想集。

〔33〕悦水編『摘草』（享保二年〔一七二七〕刊）俳諧撰集。

〔34〕和葉編『これまで草』（享保五年〔一七二〇〕序）俳諧撰集。

〔35〕乍游編『道づれ草』（享保七年〔一七二二〕刊？）俳諧紀行。

〔36〕知石編『初見草』（享保一一年〔一七二六〕刊）歳旦帖。

〔37〕来山著『いまみや草』（享保一九年〔一七三四〕刊）俳諧句文集。角書「十万堂／来山翁」。

〔38〕大圭著『搜し草』（享保二〇年〔一七三五〕刊）俳諧句集・追善集。「さがしあや」とも。

「さがしあや」とも。

〔40〕竹童編『聞書七日草』（享保頃〔一七一六～一七二六〕成）俳論書。

〔41〕初代収月編『口よせ草』（元文元年〔一七三六〕刊）雑俳撰集。内題角書「はい／かい」。

〔42〕巽窓湖十編『解夏草』（延享二年〔一七三四五〕刊）俳諧撰集。

〔43〕可竹撰『福寿草』（延享四年〔一七三四七〕跋）雑俳会所本。角書「誹／諧」。

「誹／諧」。

〔44〕文東著『俳諧鑑草』（寛延二年〔一七四九〕序）季奇。

〔45〕如銚著『菜種知便草』（宝暦三年〔一七五三〕序）俳諧辞書。「俳

諧本草」(洒竹文庫本)とも。

[46] 也有著『くだ見草』(宝暦七年〔一七五七〕跋)俳論書。書名は『徒然草』を意識した自説の謙称。

[47] 其然編『絵本草』(宝暦七年〔一七五七〕序)絵俳書。

[48] 左橋編『寅卯草』(宝暦八年〔一七五八〕跋)左橋六十賀集。挿絵入。

[49] 風之編『野坡吟草』(宝暦九年〔一七五九〕奥)俳諧句集。

[50] 無有庵編『誹諧紫苑草』(宝暦九年〔一七五九〕刊)俳諧高点头句集。

[51] 方竟白翁著『自娛文章』(宝暦九年〔一七五九〕刊)俳文集。角書

「俳／諧」。

[52] 笑宿蝶洞編『こゝらくさ』(明和四年〔一七六七〕刊)俳諧撰集。

[53] 浪化三世井波編『根白草』(明和五年〔一七六八〕序)俳諧作法書。

[54] 小野高尚編『歳時記三潮草』(明和六年〔一七六九〕序)季寄。

[55] 建部綾足著『とはじぐさ』(明和七年〔一七七〇〕刊)俳論書。

[56] 翌々散人著『こだま草』(明和八年〔一七七二〕刊)俳論書。建部綾足『とはじぐさ』に対する論難書。

[57] 都雀編『わすれ草』(天明二年〔一七八二〕序)正因一周忌追善俳諧集。角書「追／善」。

[58] 龜文『華実年浪草』(天明三年〔一七八三〕刊)季寄。内題「華実年浪草三余抄」。

[59] 什山編『続いまみや草』(天明三年〔一七八三〕刊)俳諧句文集。

[60] 叶翁著『根無草』(天明八年〔一七八八〕成)俳諧隨筆集。原題名「根なし草となり歩行」。

[61] 下郷伝芳編『手向草』(寛政三年〔一七九一〕成)俳諧追善集。

[62] 嘯山編『発句手引草』(寛政四年〔一七九二〕序)俳諧作法書。角書「俳／諧」。

[63] 問津庵其流・川々庵楚舟・錦光庵秋花編『茂々代草』(寛政五年〔一七九三〕序)芭蕉百回忌追善集。

[64] 壺仙編『つとのくさぐさ』(寛政九年〔一七九七〕刊)俳諧撰集。

[65] 滄浪居社友編『発句手引草』(寛政十二年〔一八〇〇〕序)俳諧作法書。角書「俳／諧」。

[66] 宗瑞編『三考はなひ草』(享和三年〔一八〇三〕序)季寄。「三考」は角書。「はなひ草」の改編。

[67] 伯先編『香組草』(文化元年〔一八〇四〕序)俳諧撰集。

[68] 奇淵編『たゝび草』(文化元年〔一八〇四〕序)俳諧撰集。

[69] 雀歩編『発句手引草』(文化四年〔一八〇七〕刊)俳諧撰集。

[70] 雀歩編『付合手引草』(文化四年〔一八〇七〕序)俳諧撰集。

[71] 莊丹著『能静草』(文化五年〔一八〇八〕序)俳諧句文集。

[72] 松兄編『なゝしぐさ』(文化六年〔一八〇九〕序)俳諧撰集。松兄の遺編『名なし草』を、松兄の息竹丸の依頼により卓池が刊行した書。『士朗統七部集』では「三富士合」と改題して収録。

[73] 藤英編『俳諧都凡々々草』(文化九年〔一八一二〕序)俳諧撰集。

[74] 梅間編『力草』(文化一〇年〔一八一三〕成)俳話。

[75] 雨銘・魯白編『しのぶぐさ』(文政元年〔一八一八〕刊?)俳諧追善集。

[76] 由多加・都良共編『みち草』(文政元年〔一八一八〕刊)絵入連句発句集。

〔77〕微席編『ありなし草』（文政四年（一八二二）序）俳諧撰集。

〔78〕都丸編『まつり草』（文政六年（一八二三）序）俳諧撰集。

〔79〕瓦全編『根無草』（文政一〇年（一八二七）序）俳文集。序題「瓦全文草」。

〔80〕李充編『よしなし草』（文政一二年（一八二九）序）俳諧撰集。

〔81〕梅間編『楽しみ草』（文政一二年（一八二九）刊）俳諧隨筆。

〔82〕不転編『まがきくさ』（文政一二年（一八二九）刊）五十賀集。

〔83〕岡崎六供庵住吾嬭庵評『浮草集初編』（嘉永二年（一八四九）序）

狂俳冠句高点集。内題「蘋集初編」。序に「此集の標題を浮草集といふは、唐詩に東風緑蘋と作り、乙由は萍やけふはあちらの岸に咲くと作たる句の意に元づきしなり。それとも狂句の風体年々に変わり日々に新にして、纒なる言葉も妙に活図する事、恰も浮草の風に随て漂ふ姿に似たれば名づけたるものなり」とある。

〔84〕白斎編『おもかげ草』（嘉永三年（一八五〇）序）俳諧追善集。

〔85〕加藤正得著『これこれ草』（嘉永三年（一八五〇）序）季寄。角書「俳諧／季寄」。

〔86〕白斎編『ながいきくさ』（嘉永四年（一八五二）序）白斎八十賀集。

〔87〕半山編『くすり草』（万延元年（一八六〇）序）俳諧撰集。

〔88〕蒼山・春湖編『ひよひよ草』（安政五年（一八五八）奥）俳諧撰集。

〔89〕柳江庵評『狂俳風見草』（安政六年（一八五九）序）冠句高点集。

〔90〕健翠閣（柳雨）編『薫り草』（安政六年（一八五九）序）俳諧追善集。

〔91〕黙池・菊雄編『俳諧つれづれ草』（文久元（一八六一）刊）俳諧隨筆。

◇「標題」雑話◇（相田満）

「標題」の付く書名②

相田満

題徐状元補註蒙求箋註（岡白駒）・蒙求標題・蒙求標題大綱鈔（毛利貞斎）・標題箋註統蒙求校本・蒙求標題詠（樋口好古「知足斎」）・蒙求統紹標題詠（樋口好古「知足斎」）・蒙求標題骨牌主客掲場法（肥田政教）・標題補註蒙求（清原宣賢）・国史蒙求標題（衣笠孝郷）・「国書基本データベース」による検索をおこない、「標題」を書名に持つ典籍でまず目立つのは、『蒙求』にちなむものである。

『蒙求』と「標題」という語句との関係は非常に密接である。『蒙求』は、唐の李瀚撰になる四言句の対標題を本文とするものに自注が付されたものであったが、標題自体も独立して流布している。また、非常に盛行を見るに至った南宋の徐子光による「補注本」は、巻頭に「標題徐状元補注蒙求」あるいは「標題補注蒙求」という表記を有しており、書名に「標題」という語句と『蒙求』という言葉の結びつきをより緊密にするとともに、「標題」という語句を広めるのに大きな役割を果たした。

(注一) 木村三四吾氏・井上壽氏校注・新潮日本古典集成『竹馬狂吟集 新撰犬筑波集』(昭和六十三年、新潮社刊)「解説」二八一頁に指摘がある。

(注二) 沢井耐三氏『竹馬狂吟集』覚書―序文および二・三の句について―(『国語と国文学』第七十一巻第五号・平成六年五月)四二頁に指摘がある。

(注三) (注一) 上掲書に同じ。

(注四) 今栄蔵氏「パロディの世紀―十七世紀日本文学の側面―」(『大谷女子大國文』第二号・昭和四十七年一月)による。

(注五) 『俳文学大辞典』(平成七年、角川書店刊)「犬筑波集」(井口壽氏担当)の項に指摘がある。

(注六) 西村真砂子氏は、「西武撰『鷹筑波』試論」(『連歌俳諧研究』第六十五号・昭和五十八年七月)の中で、俳諧圈における不受不施派の文化活動に注目し、標題を新視点から照射し直すことによって、『鷹筑波』の書名由来も、単に『犬筑波集』や『犬子集』に対するものではなく、光悦の積尊御領であった「鷹が峰」に準ずる意図があったのではなからうか」と推測した上で、「つまり、俳書における積尊御領として、日奥・日陽・妙重および光悦に対する不受不施派信徒の法要集として、『鷹筑波』が編集された」と説かれた。通説とは異なるスタンスから標題を検証し、以て当該書の編集意図にまで迫る手法は、標題文芸の研究方法として見習う価値を有する。

(注七) 例えば、大鶴庵塊翁編『ことばくづ』は、奥書に「集の名の言葉肩は五ツの巻の挙句毎にことば肩といふ事のあなれば、いらざる言葉をつくりて題せむよりはと、ありの俣なる言葉肩をもて名としたる也」、「名録のきれざるやうにならざる事は、勞して功なき業に似て、かの言葉肩にはあなれど、道の同朋海内一連のころをぞこめたる」と記述が見え、編者の標題に込めた矜持の念も窺える点で貴重である。

(注八) さるみの会編『尾三古俳書解題』(昭和五十七年、研文社刊)所収「猫の耳」解題(八亀師勝氏担当)に指摘がある。本書の標題については、服部直子氏も、

書名は『枕草子』(「むつかしげなるもの…猫の耳の中」)にちなむが、暗に「此道の風輩」を諷し南泉和尚の「斬猫得悟」へ跋ぐにちなむか。

と説かれる(『俳文学大辞典』「猫の耳」の項)。

(注九) 田中善信氏『初期俳諧の研究』(平成元年、新典社刊)所収「貞門の成立をめぐって」の中に、

犬子草を見たことのない人はなからうが、これを手にとって眺めようとした人もまたなからう。そうした雑草の名をとって俳諧撰集の題号として与えたところに、貞徳の俳諧観があった。

とする指摘がある。

(注十) 田中善信氏は(注九)上掲書所収『鷹筑波』の成立をめぐって」の中で、貞門第一の俳諧撰集たる『鷹筑波集』の編集上の杜撰さを解

析し、その淵源として、貞徳一門の「俳諧をまともな文事として扱うにはまだどこかふっ切れない気持があった」ことを挙げられる。

(注十一) 新日本古典文学大系69『初期俳諧集』(平成三年、岩波書店刊)所収「過渡期の撰集―『犬子集』の付句を中心に―」(加藤定彦氏執筆)に指摘がある。

(注十二) 乾裕幸氏「撰集合戦―『犬子集』と『俳諧発句帳』―」(『俳諧攷』昭和五十一年刊、俳諧攷刊行会)に詳しい。

(注十三) (注九) 上掲論文の中に、「この命名は連歌の『発句帳』に倣ったものかと思われるが、寛永十年当時俳諧を連歌と同等に扱うがことき

『俳諧発句帳』の題号を掲げていることは、やはり立圃の俳諧観を示しているとみていいのではあるまいか」という指摘がある。

(注十四) 榎坂浩尚氏「明暦二年の俳壇について」(『国語国文』第二十七巻九号・昭和三十三年九月)に詳しい。

(注十五) 以求子跋は「往昔老人草ヲ結ビテ以テ魏頼ニ報ズ。此ノ巻モマタ俳道ニ報ジテ幼学ヲ誘フトキハ、則名実共ニ虚シカラズカナ」と、『左伝』宣公十五年記事、あるいは『蒙求』『魏頼結草』に引かれてよく知られた「草結び」の故事を引いて、俳道の先輩の恩に報いる意をもって本書が刊行されたと記す。

(注十六) 『俳文学大辞典』(平成七年、角川書店刊)「口合草結」(鈴木勝忠氏担当)の項に指摘がある。

(注十七) 米谷巖氏編・解説『せわ焼草』(昭和五十一年刊、ゆまに書房)二六六頁。

(注十八) 国会図書館本・東大酒竹文庫本等、『世話尽』なる標題の伝本群も存在する。

(注十九) (注十七) 上掲書「解説」二六五―二六七頁に詳しい。

(注二十) 『中村幸彦著述集 第三巻』(昭和五十八年刊、中央公論社)四五四―四五五頁。

(注二十一) (注二十) 上掲書四六三頁。

(注二十二) 『俳文学大辞典』(平成七年、角川書店刊)「くだ見草」(野田千平氏担当)の項に指摘がある。

(注二十三) 『俳文学大辞典』(平成七年、角川書店刊)「埋草」(永野仁氏担当)の項に指摘がある。